

卒業論文「レーモン・ラディゲと日本の作家—大岡昇平の場合—」要旨

人文学部比較言語文化コース比較文学分野

1510074a 滝沢星里

本論は、レーモン・ラディゲ『ドルジェル伯の舞踏会』(*Le Bal du comte d'Orgel*, 1924)と、大岡昇平『武蔵野夫人』(1950)の二作品を取り上げ、心理、社会、自然という三つの観点から両作品を比較することにより、大岡が『武蔵野夫人』において『ドルジェル伯の舞踏会』の影響をどのように昇華させたのか明らかにすることを目的としている。第一章では、大岡が『ドルジェル伯の舞踏会』で特に注目していた心理描写について、『武蔵野夫人』にみられる具体的な場面を取り上げながら明らかにする。第二章、第三章ではそれぞれ社会的条件と自然について、両作品間における役割の違いを考察する。以上の手順を踏むことにより、ラディゲと大岡双方の作品世界に対する理解が深まるとともに、日本におけるフランス文学受容の興味深い一面が浮き彫りになるはずである。

『ドルジェル伯の舞踏会』は、いわば純粹心理小説である。感情の分析という点に最も重きをおいて描いていたために、自然や社会といった物語の舞台装置になるものは必要最低限の記述にとどまっていた。大岡は『ドルジェル伯の舞踏会』からその特徴的な心理描写の手法を学んだが、一方で『ドルジェル伯の舞踏会』では重要視されていない社会や自然といった要素に目を向けて、『武蔵野夫人』では人間をその中に位置づけようとした。これはおそらく、自らが復員者となった大岡自身が抱いていた、戦争という特殊な出来事を経験した人間の心理がその後の社会でどのように働くのか、という関心の結果であろう。だからこそ『武蔵野夫人』では、社会的条件や自然といった人間の心理に影響を与える外部の事件を描きながらも、『ドルジェル伯の舞踏会』の心理描写の仕方を模倣した心理小説という形で、第二次世界大戦後の社会で生きていく人間の姿を描いたのである。